

マルコによる福音書

～堀川寛による広島弁訳～

(広島弁訳の意味) (訳者の解説・蛇足)

第1章

イエス・キリストによる福音が始まった!

預言者イザヤの書にこう書いてある。「ええか! わしはおまえより先に使者を行かして、おまえが歩きやすいようにしといちゃる。荒れ野で誰かがおらびよる(叫んでい)『主が来られるけえ、道をええがいにせえよ!』その預言の通り、バプテスマのヨハネいう人が荒れ野に現れて、罪を赦してもらうために心を入れ替えてバプテスマを受けんさい、とみんなに言うた。そしたらなんと、ユダヤ中の人らや、エルサレムに住んどる人らあが、ぞろぞろヨハネんとこへきて、罪を告白して、ヨルダン川でバプテスマを受けた。

ヨハネはのう、らくだの毛皮を着て(らくだのモモヒキじゃない!)、革の帯を締めて、何とイナゴと野蜜を食べて暮らした。

ほいじゃがヨハネはこう言うた。「わしよりも凄い人が後から来てじゃ。わしやあ、その人の履き物のひもを解く値打ちもないんじゃ(奴隷になる資格すらない)。わしやあ水であんたらにバプテスマを授けたが、その人は何と神様の霊でバプテスマを授けて下さるそうじゃ!」

ちょうどそのころ、イエス様がガリラヤのナザレいうところからヨルダン川に来て、ヨハネからバプテスマを受けた。水の中から上がったとたん、天が裂けて“神の霊”が鳩みたいにご自分に降ってくるのが見えたそう。その瞬間、「あんたはわしの大切な子、わしを喜ばせてくれる子じゃあ」という声が、天から聞こえてきたんじゃと。

その後、“神の霊”はイエス様を荒れ野に連れ出した。イエス様は水も食べ物もない荒れ野で40日を過ごし、サタン誘惑を受けちゃった。野獣もおったけど天使が守ったんじゃと。

バプテスマのヨハネが(ヘロデ王を批判して)捕まった後で、イエス様は生まれ育ったガリラヤに帰って、神様の福音を伝えはじめてこう言うちゃった。「ついにその時が来たで。神の国が始まったんじゃ。心を入れ替えて福音を信じんさい!」

イエス様がガリラヤ湖のほとりを歩いとったとき、シモンと兄弟アンデレが湖で網を打ちよるのを見つけた。二人は漁師じゃった。イエス様は言うちゃった。「わしについて来い!(魚じゃのうて)人間をとる漁師にしちゃろう!」そうしたら二人はすぐに網を捨ててついて行った。もうちいに行ったら、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしようた。イエス様が彼らに(同じように)声をかけたら、この二人は自分らのおやじゼベダイも従業員もほったらかして、イエス様の後について行った。

ガリラヤ湖で弟子にした漁師たちを連れて、イエス様はカファルナウムに来た。イエス様は安息日(土曜日)に(ユダヤ人が集まる)会堂に入って、教え始めちゃった。集まった人らあは、その教えにブチ(非常に)驚いた。律法学者みたいなつまらん教えじゃのうて、聞いとるもん(者)が圧倒されるような教えじゃったんじゃ。ところがその会堂に悪霊に憑かれた男がおって、叫びだしたんよ。「ナザレのイエス、何しに来たんやあ! わしらを滅ぼしに来たんじゃろうが! 正体は分かるとるで。神様の使いじゃろう!」イエス様が、「カバチ(うるさい)! この人から出て行け!」と叱りつけたら、悪霊はその人にけいれんを起こさせて、叫びながら出て行ったんよ。みんなは腰を抜かすほど驚いて、「こりゃ一体どうなるとるんかいのう! 全く新しい力のある教えじゃあ。悪霊までもが言うことを聴くとはのう!」、と話おうた。イエス様の評判はあつという間にガリラヤ地方の隅々まで広まったんじゃ。

イエス様一行は会堂を出てシモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒じゃった。ところが家のもん(者)が、シモンのしゅうとめが熱を出して寝込んでるけえ、何もおもてなしはできんので、言うたんよ。イエス様はわざわざしゅうとめのねき(そば)まで行って、手を取って起こしてやった。そしたら熱がすうと下がったけえ、彼女は(大ご馳走で)みんなをもてなしたんと。

夕方になって(イエス様の噂を聞きつけた)人らあが、病人やら悪霊に憑かれたもん(者)をようけい(大勢)イエス様の所へ連れてきて、シモンの家の玄関に人が溢れた。イエス様はその病人らを次々に癒しちゃった。また、悪霊を追い出したんじゃけど、悪霊には何も言わせんかった。悪霊はイエス様がど

ういうお方が知ったけえわざっとそうしちゃったんよ。

朝早うまだ暗いうちに、イエス様は町外れの寂しいところへ行って祈りよっちゃった。シモンと仲間らは(イエス様がどっか行った思うて必死で)捜した。ようやく見つけたら、「何をしよってんですか!どんだけ捜したあ思うってんですか!」いうて文句言うた。イエス様は(涼しい顔で)言うちやった。「みんな、他の町や村にも行って福音を伝えるでえ。わしはそのために来たんじゃけえ。」そして、ガリラヤ中の会堂に行つて、福音を伝えて、悪霊を追い出した。

そんなある日、重い皮膚病(その頃一番恐れられ嫌われていた)を患った男が、突然イエス様の前に来てひれ伏し、「お心一つで汚れたわしを清めることがおできになってです!」と叫んだ。イエス様はその男をかわいそうに思うあまり、病気がうつることも気にせず、手を伸ばしてその男にさわし、「わしの心じゃ。清くなりんさい。」言うちやった。そしたらその男の皮膚病はたちまち治つて、きれいな体になった。イエス様は、その男がぐずぐずしよるけえ、(厳しい口調で)言うちやった、「誰にも、なんも言うちやあいけんで。急いで祭司の所へ行って体を見せて、病気が治つたことを証明してもらいんさい。そして全快の印のいけにえを献げて晴れて自由の身になりんさい。」ところがその男は、祭司の所に行くどころか、至る所で自分の身に起こつた奇跡を言い広めたんじゃ。それを聞いた人らがどつと押し寄せてきたけえ、イエス様は町にも入れんようになって、町外れにおられたんじゃけど、それでもようけえ人が集まつてきた。

第2章

それからしばらくして、イエス様が再びカファルナウムに来られたとき、イエス様がおられることが知れ渡つたんで、人がようけい集まつて、家の中ははあ(既に)一杯で、玄関の外まで溢れた。それでもイエス様が教えよっちゃた時のことよ。4人の男が寝たきりの人を運んで来たんよ。ほいじゃが、家の外まで人が溢れとつたけえ、イエス様の近くに連れて行くこたあはできん。そこで4人は何と、屋根に上がつてイエス様がおつてのへん(辺り)の屋根板をめで(壊して)穴を開け、病人をつり下ろしたんよ!イエス様は、(その様子を見て)こいつらには信仰があ

る思うて、寝たきりの人に、「わしの息子よ、あんたの罪は全部赦されるで」言うちやった。

ほいじゃが、そこにおつた律法学者らが偉そうに座つとつてこう思いよつた。「こんなあ(この人)は何を言いよるんな!神様を冒瀆しとる。罪を赦せるのは神様だけじゃろうが!」イエス様はそんなら(彼ら)の思いを見抜いて、「なんで、あんたらはそう思うんか?寝たきりの人に『あんたの罪は赦された』言うんと、『起きて、床を担いで歩きんさい』言うんと、どっちがみやすい(易しい)んか?人の子(イエス様が自分のことをこう呼ばれたときにはご自分の働きに直結する行動や発言が起こる)が地上で罪を赦す権威を持つとることを見せちゃろう!」そして寝たきりの人に言うちやった。「あんたに言うで。起き上がつて、床を担いで家に帰りんさい!」その人はすぐに起き上がつて、床を担ぎ、みんなが見とる前をすたすた歩いて出て行きよつた!そこにおつた人らあはブチ(非常に)驚いて、「こんなこたあ今まで見たこたあない!」言うて、神様を賛美したんと。

イエス様はまたガリラヤの湖のほとりへ行くと、ようけ(大勢)の人が集まつて来たけえ、彼らを教えちやつた。その後で町へ戻る途中、アルファイの子のレビが通行税を集める所に座つとるのを見て、「わしについてこい!」言うちやった。レビはすぐに立ち上がつて、イエス様について行つた。レビは(イエス様の弟子にしてもらったことが)うれしゅうて、徴税人仲間やら罪人(律法で禁じられていた職業に就いていた人)やらを集めて大宴会を催したんよ。もちろんイエス様と弟子たちも一緒じゃつた。

そしたら、ファリサイ派(律法に厳格)の律法学者が、イエス様が徴税人や罪人らと食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうしてあんたらの師匠は徴税人や罪人らと一緒に食事をしてんかいのう」と言うた。イエス様はこれを聞いて言うちやった。「医者が必要なんは元気な人じゃのうて病人じゃろうが。わしが来たんは、正しい思うとる人を招くためじゃのうて、赦されにやいけん思うとる人を招くためじゃ!」

バプテスマのヨハネの弟子たちとファリサイ派の弟子たちは(週2回)断食しとつた。それを知つとる人らがイエス様のところへ来て言うた。「ヨハネの弟子たちとファリサイ派の弟子たちは断食しよるのに、なんであんたの弟子たちは断食せんのですか?」イエス様は言うちやった。「あんたら結婚式で断食

するんか？花婿がおったら一緒に飲み食いするじゃろうが。断食するバカはおらんで。ほいじゃが、花婿がおらんようになる日が来るんよ。そんな時にはわしの弟子らは断食するようになる。

新しい布で古い服に継ぎ当てるもんはおりやせん。そがいなことしたら(縮みやすい)新しい布が古い服を破いて、継ぎ当てる前よりひどくなる。えろう発酵しよる新しいぶどう酒を伸びにくくなった古い革袋に入れやせんじゃろう。そがいなことしたら、ぶどう酒が革袋を破って、ぶどう酒も革袋もだめになる。新しいぶどう酒はよう伸びる新しい革袋にいれにゃいけんじゃろう。」(イエス様の福音は全く新しいので、当時のユダヤ人が大切にしていた古い枠組みには収まりきれない。それどころか、古い枠組みをぶちこわすことになる、という意味)

ある安息日(全ての労働が禁じられている)に、イエス様一行が麦畑のそばを通りよっちゃったとき、弟子たちが実った麦殻を揉み出して麦を食べ始めた。それを見つけたファリサイ派の連中がイエス様に、「見てみんさい！あんたの弟子らはなんで安息日の律法を破って収穫作業をするんですか？」と言った。イエス様は言うちゃった。「(あんたらのヒーローの)ダビデ王が、自分も家来もえらい腹が減ったときに何をやったか、聖書に書いてあろうが。読んだこたあないんか？ダビデ王は神様の家に入って、祭司しか食べちゃいけんお供えのパンを食べて、家来にもやったじゃあないか。ありゃあ律法破りじゃないんか！」

そしてこう言うちゃった。「安息日はあんたらのためにある。あんたらが安息日のためにあるんじゃない。(人が幸せに暮らすために神様は安息日を定められた。安息日の決まりに縛られて人間が不幸になったら意味がない)人の子(イエス様のこと/2:10参照)は安息日の決まりなんか縛らりやあせん。むしろ安息日の主(あるじ)でもある。」

第3章

イエス様はまた会堂に入っちゃった。そうしたら片腕が不自由な人がおった。(その日は安息日だった)そこにおった人らあは、もしイエス様が安息日に病人を治したら訴えちゃろう思うて、注目しとった。イエス様はその人に、「真ん中に立ちんさい」言うちゃった。そしてまわりの連中にかう言うた。「安息日に律法で許されとるんは、エエことをすることか、ワリ

イことをすることか。命を助けることか、見殺しにすることか。」連中は黙っとった。イエス様はその様子を見て頭にきたけど、そいつらがあまりにもへんくう(頑固)なんで悲しゅうなった。そして手の萎えた人に「手を伸ばしんさい」言うちゃった。(その人は恐る恐る)手を伸ばしてみた。そしたら元どおりになったんよ！ファリサイ派の連中は飛び出して行って、(それまで仲が悪かった)ヘロデ派の連中と結託して、どうやってイエス様を殺そうかいうて相談し始めた。

イエス様は弟子たちと一緒に(町から離れて)湖の方へ逃げちゃったんじゃけど、ガリラヤ地方からようけの人らあがついて来た。それに、ユダヤ、エルサレム、イドマヤ、ヨルダン川の向こう側、ティルスやシドンの辺りからも、イエス様の噂を聞きつけた人らあが、これまたようけえ集まってきた。イエス様は群衆に押しつぶされそうになったけえ、弟子たちに小舟を用意させちゃった。イエス様に触ってもろうたら病気が治る思うて、イエス様のところへ押し寄せてきたけえよ。悪霊どもは、イエス様を見るなりひれ伏して、「あんたは神様の子じゃ！」言うて叫んだ。イエス様は、自分のことを言いふらしちゃいけん言うて、悪霊どもに厳しゅう言うちゃった。

(ある日)イエス様は小高い丘に上ると、見込みのありそうなやつらと呼び集めた。そのうちの十二人を特別に「使徒」と名づけちゃった。それは、こんならをご自分の身近に置くためと、ご自分の代わりに派遣して、教えを伝えたり、悪霊を追い出す力を持たせるためじゃった。こうして十二人は任命された。シモン(葦)にはペトロ(岩)というあだ名を付けられた。ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲス、つまり「雷ボーイ」というあだ名を付けられた。(すぐに頭に血が上ったから)アンデレ、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、それに、イスカリオテのユダ。このユダがイエス様を裏切ったんよ。

イエス様が家に入られると、群衆がそこにも押しかけてきて、食事をするどころじゃなかった。ところが、イエス様の身内のもんが、イエス様を無理矢理連れて帰ろうとした。「あの男は気が変になっとる」言うもんがおったけえじゃ。エルサレムから来た律

法学者らも、「あの男は悪霊の親玉に取り憑かれとる。悪霊の親玉じゃけえ悪霊を押し出せるんじや」いうて言いよった。

そこでイエス様は彼らをねき(そば)へ呼んで、たとえ話で話された。「どうして、サタンがサタンを追い出せるんかのう? 国の中で分裂したら、国が成り立たんじやろうが。家族がバラバラじゃったら、その家はだめになってしまふ。それと同じよ。サタンどうしがもめたら、うまいこといかんようになって、終わってしまう。強盗でも、家に入ったら最初に一番強いやつを縛り上げるじやろうが。(そうせんにゃあ逆襲におうて、)物取りは失敗するけえのう。(悪党でも物事の通りは分かっている!)よう言うとかぞ。おまえらが犯す罪や、呪いの言葉は、神様が赦して下さる。ほいじゃが、神の霊をなめてかかるようなやつは、永遠に赦されんぞ。」

イエス様がこう言うちやったのは、「あいつは汚れた霊に取り憑かれとる」と言う連中がおったからじゃ。(イエス様を冒瀆することは神の霊を冒瀆することになる)

(またある日、)イエス様のお母さん(マリア)と兄弟たちが家の外に来て、人をやってイエス様に出てくるように言うた。(家の中には)ようけの人がイエス様のまわりに座とった。使いのもんが「あんたのお母さんと兄弟姉妹らが家の外であんたを呼びよつてですよ」と言うて、イエス様は、「わしの母とは誰やあ? わしの兄弟とは誰やあ?」と答えて、まわりに座とる人らを見回して言うちやった。「見んさい! ここにわしの母がおる。わしの兄弟がおる。神様の御心を行おうとする人こそが、わしのほんまの兄弟、姉妹、また母親よう。」

第4章

イエス様はまた湖のほとりで教え始めたんじやが、あまりにもようけの人が集まってきたんで、イエス様は船に乗って、船の上から話しちやった。イエス様はたとえ話で教えてのことが多かったが、こういう話しをされた。

「よう聞きんさいよ。ある百姓が種を蒔いた。蒔きよる間に、ある種は(風に煽られて)道端に落ち、鳥に食べられてしもうた。別の種は、石だらけで土の少ない所に落ち、土が浅かったけえすぐに芽を出した。ところが、太陽が照りつけると焼けて、根がないけえすぐに枯れてしもうた。別の種は茨の中に落ち

た。ある程度は伸びたが、茨にふさがれて実をつけることはできんかった。また、別の種はええ土地に落ちたけえ、芽を出してよう育ち、30倍、60倍、100倍もの実をつけた。」そして、「聞く耳のあるもん(者)はよう聞きんさいよ」と言うちやった。(私の話の真意をくみ取りなさいよ、という意味)

まわりのもんがおらんようになったとき、12使徒とイエス様について来とったもんらが、さっきのたとえ話はどういう意味なんか尋ねた。イエス様は言うちやった。「あんたらには神の国の奥義が明かされとるが、他のもんにはたとえ話でしか話さん。なんでか言うて、『彼らは見えとる所しか見とらん。聞こえとることしか聞いとらん。うわべだけで心から求めとらんけえダメなんじや』いうて書いてあるじやろう。」(御利益で信じている人には神の奥義は与えられない)またイエス様はこうも言うちやった。「このたとえ話の意味が分からんのか。ほいじゃあ他のたとえ話は無理じゃのう!(ため息)種蒔きの百姓とは、神の言葉を伝える人のことじゃ。種が道端に落ちるとはこういう人のことじゃ。神の言葉を聞いても、すぐにサタンに奪い取られてしまふ(すぐに忘れる)。石だらけの所に蒔かれるとはこういう人のことじゃ。神の言葉を聞いて最初は喜んで受け入れるが、根が浅いけえ、しばらくはええけど、神の言葉のために苦しい目におうたら、すぐに投げ出してしまふ。茨の中に蒔かれるとはこういう人のことじゃ。神の言葉を受け入れて従い始めるんじやが、この世の思い煩いや金の誘惑、それにいろんな欲望に惑わされて、神の言葉がつぶされてしまい、実にならんのか。ええ土地に蒔かれるとは、神の言葉を聞いて受け入れ、しっかり根付いて育った人じゃ。(その人の人生に)30倍、60倍、100倍もの豊かな実が結ぶんよ。」(お前らはどの土地かのう?)